

# 深イ～話！

No.95

——“致知”人生を照らす言葉より 鈴木秀子著「幸せはすでに目の前にある」——

この女性には、生まれつき知的障害のあるお子さんがいます。

その子が生まれたばかりの頃、親戚から「うちにはそのような血統がないのだから、あなたの家系にあるんでしょ」とか、「妊娠中のあなたの生活が悪かったのよ」とか、多くの辛い言葉を浴びせられたようです。

この女性の唯一の願いは、男の子が少しでも一人前に近づき、税金を納められるだけの力をつけて自立してくれることにありました。

周囲の冷ややかな視線や言葉に押し潰されそうになりながらも、彼女は息子さんの成長のために力を尽くしました。いい医者があると聞けば、どんなに遠くても連れて行き、勉強も教えました。

しかし、いくら頑張ってみても、目に見えるだけの効果はなかなか表れませんでした。

努力して治療や教育を続ければ必ず幸せへの道は開けてくる、そのためには何としてもこの子を変えなくては、という一念だったそうです。

息子さんが十四、五歳になった頃です。

その日も、彼女は息子さんを病院に連れて行っていました。名医がいるとの噂を聞き、遠くにまで足を運んだのです。しかし、一縷の希望を託して診察を受けてみたものの、やはり結果は同じでした。治療費ばかりが膨らむ一方で、全く効果が見えない現実に落胆し、精神的、肉体的にもどん底の状態でした。

重い足取りで家路につき、玄関のドアを開け、畳の上にへたへたと座り込んだ時のことです。

息子さんが「お母さん」と声を掛け、ニコッと笑いながらコップ一杯の水を差し出してくれたのです。

彼女が目を覚まされたのはこの瞬間でした。

「自分はいままで何をやってきたのだろう。この子さえ変わってくれたら幸せになれると思っていたのに、幸せはいま、ここにすでにあったとは……」

息子さんの純粋な笑顔と行為をとおして、そう強く気づかされたといいます。落ち込んでいた自分にコップ一杯の水で優しく勇気づけてくれる息子がいつも傍にいてくれる。それまで全く気がつかなかった幸せを初めてしみじみ味わったというのです。

この気づきは彼女を大きく変えました。それまで気になって仕方がなかった親戚や周囲の言葉や目線も冷静に受け止められるようになり、息子さんをとおして自分自身が大きく成長してきた喜びも実感できるようになりました。それにも増して、息子さんが生きていてくれることへの深い感謝の思いが込み上げてきたそうです。

「遠くにある幸せを求めては挫折して落ち込み、また追い求めては悲しみに涙する。そのことを何度繰り返してきたことでしょう。しかし、誰もが考えられないほどの多くの涙を流さなかったら、我が子のありのままの生き方を受け入れることはできませんでした。いまの私があるのは、あの子のおかげです。あの子の親であることに心からの幸せを感じます」

息子さんは養護学校を出た後、親元を離れて遠くにある国の施設で生活しています。

